

K-MIC REPORT #2

MAY 2022

第1回インタビュー企画！



第1回インタビュー企画は、窪田製薬ホールディングス株式会社・代表執行役会長、社長兼最高経営責任者（CEO）の窪田良先生にお越しいただきました！

起業に関することから一般的な学生生活に通じること、さらには医師の話や窪田先生ご自身の人生経験談まで、様々なお話を伺うことができた大変貴重なインタビューでした。

窪田先生、ありがとうございました！

起業時の役割分担はどのように行うべき？

スタートアップフェーズの時は少人数でやらざるを得ないため、成長軌道に乗るまでは一人一人が様々な役割をやるしかない。Versatility（多才さ）が鍵。英語のことわざで、一つ以上の役割や責任を果たす様子を“wear many hats”と表現するがまさにそのことである。

アメリカと日本の病院の違い？

アメリカはものすごく分業が進んでいる。医者は専門性に優れた仕事のみを行うため、専門性に特化したいと思う人はアメリカ向きかもしれない。

一般企業とは違う性質を持つ製薬会社。社員さんのモチベーションをどうマネジメントする？

「自分の技術を世に出したい！」だけでは人はついて来てくれない。社員一人一人のビジョンと、例えば「失明を撲滅する」といった会社のビジョンが重なっていること、そしてそれに向かっていく合理的な説明・道があることが大切。

上場企業ならではの投資家との関係。どうやってビジョンと両立している？

そこは非常に難しいところ。特に製薬は時間がかからないと結果がわからないことと、見極めに高い専門性が必要である点が複雑。しかし、医学の世界では飽くなきニーズが存在するからこそ、それを強烈に応援してくれる人がいて、そういった人々に支えられていると感じる。

価値観の多様性を養うために学生時代からできることは？

世界中に出て友達を作りその人の価値観を学んでいくこと、そして多様性を理解することが大切。短期の留学だって意

味がある。0より1、1より10、10より100のメンタルを持つことと、日頃から視野を広げる意識を持つことが大切。

辛いことや苦しいことを乗り越えるために大切にしていることは？

言葉で言うならnever give up。もう一つ大切なことはやっていることを楽しむこと。例えば緑内障の原因遺伝子の発見には7年かかった。よくそんなことを続けられるなと思った人もいると思う。でも自分はそれを苦勞と思わなかった。プロセスを愛することは非常に大事である。

様々なことに興味があるがテスト、課題などに時間を取られてしまう。起業しようと思っても時間がなくなってしまう気がする…時間のマネジメントのコツは？

実は時間の両立のコツというのはそんなに考えたことはない。例えば臨床医の時は手術のことしか考えていなかった。その時その時、目の前にあることを一生懸命やることを大切に、目標を達成してきた。いかに早くルーティンワークに落とし込めるか、そして落とし込んだら（楽に出来るようになったら）新しいことに挑戦するというのが自分の生き方。



窪田良先生

慶應義塾大学医学部卒。眼科医、医学博士。
緑内障原因遺伝子「ミオシリン」の発見で須田賞を受賞。
慶應病院や虎ノ門病院にて1000を超える執刀経験を持つ。
2002年にバイオベンチャー「アキュセラ・インク」を米国のシアトルで起業。
2016年米国起業初の東証マザーズ単独上場を果たす。
2016年12月に窪田製薬ホールディングス株式会社を発足。

編集:伊庭知里・窪田翔・田村友宏 制作:戸澤小春

k-mic

(k-medical innovation club)

HP: k-mic.org

Twitter: @kmedinnovclub

第1回教育プログラム！

k-micでは、2022年に4月から7月にかけて計4回の教育プログラムを予定しています。第1回教育プログラムは、k-micのアドバイザーである田澤雄基先生（慶應義塾大学イノベーション推進本部特任講師）と、堅田侑作先生（慶應義塾大学医学部眼科特任助教）にご講演をいただきました！4月23日に行われたこのイベントは、2022年度のk-micキックオフイベントも兼ねていました。第一線でご活躍される先生方のご講演は非常に刺激的でメンバーの心に響き、活発な質疑応答も行われました。

田澤雄基先生

“学生から始めるチャレンジの秘訣 ～医学生で起業し、臨床、研究、開業を経た立場から～”



田澤雄基先生

2012年（当時医学部5年生）株式会社エスティムを創業。
主力事業は、Hospeeという医療機関向け決済アプリ。
その他電子カルテや医療系学生向け情報サイト等様々な事業を展開。
現在はMIZENクリニック院長の他、慶應医療ベンチャー大賞実行委員長（-2021）、大学発スタートアップを育てるプロジェクト（GTIE）運営、未来予防医療講座での研究など多方面で活躍中。

医学部生へのアドバイス

医学部入学以来12年間様々な活動をされてきた田澤先生は、「人生を通じてやりたいことをやり続けるために学生のうちにやるべきこと」は、「多様で自由な働き方を貫く軸足を作ること」であると言います。田澤先生は医師、起業家、研究者の3つの顔を持ちますが、すべて「最後の1日まで健康に文化的に生きることが当たり前」の未来を創る」というミッションに基づいており、それは学生時代の最初に起業時から変わらないそうです。学生の間はトラベリングを気にせずに様々な経験をして自分の軸足を見つけていき、社会人になったときにその軸足をもとに必勝戦略を見つけ一気にフルコミットする。小さな活動がそれぞれ無関係であったり対立するものであったりするのはではなく、何か大きな最上位の目標に紐づけられたものであることが、上手にマネジメントする上で大切だと言います。

堅田侑作先生

“なんで僕がCEOに！？ ～進路に悩んだら、医学部に入って社長になろう！～”

なぜベンチャー・スタートアップなのか～起業医のすすめ～

新薬は誰が創っているのでしょうか。実は、新薬のシェアは米国の大学発ベンチャーが独占しています。現在日本の医薬品医療機器は3兆円の貿易赤字を抱えています。堅田先生は、実験動物で確認した技術の臨床有効性を証明し目の前の日本の患者さんにいち早く有効な治療を届け、日本発の創業で日本の経済・社会保障をより豊かにすることを目標に、日本発の創業を実現させたいと考えようになったそうです。しかし、日本では人材、資金、技術や規制などの環境が整っておらず、創業ベンチャーの壁は非常に高いのが現状です。

一方で、慶應発ベンチャーは次第に盛り上がってきています。目の前の患者を救うことのできる臨床医、世界の患者を救うことのできる研究医に加え、日本の経済も救って国を豊かにする「起業医」という非常にやりがいのあるキャリアの選択肢があることを、ぜひ早い段階で知っておいてほしいという”起業医のすすめ”で講演を締めくくってくださいました。



堅田侑作先生

遺伝子治療研究の傍ら、臨床医として網膜変性外来を担当。
株式会社レストアビジョンCEO。
未だ有効な治療法がない指定難病「網膜色素変性症」に取り組む。
一度の簡易な眼内注射で動物モデルマウスの視覚が再生する治療法を開発。

メンバーの！
つぶぎ

k-mic reportをご覧になっている皆さん、いつもありがとうございます。副代表の田村です。最近、決断を迫られる立場に立つことが多くなってきました。自分の直感を信じるか、仲間の言葉を信じるか、擦り減っていくのを感じます。目紛るしく移ろうこの世界で、変化と持続のバランスを取ることこそが次世代に求められる資質なのかなと感じる今日この頃です。強く、しなやかな生き方を目指して。今日も一日。